

## 和田忠彦教授退任記念シンポジウム 「遊戯の始まり」

報告 山口裕之

「遊戯の始まり」——いまふりかえってみるとき、このタイトルはあの時間をまさに言い表していたようにも感じられる。二〇一六年十二月一〇日に開催されたこのシンポジウムは、「和田忠彦教授退任記念」と明記されているように、二〇一七年三月末をもって東京外国語大学を退職される和田忠彦先生のこれまでの活動を俯瞰する性格をもつものである。しかし、「シンポジウム」というかたちをとることになったこのイベントは、「最終講義」とはおよそ異なる広がりとなり、そして幸せな華やぎを与えるものとなった。

企画に中心にかかわっていたのは、和田先生のもとで学んだ四人の若手研究者たち。和田先生の「弟子たち」の実力と研究上の企画・運営力にはいつも感心させられているけれども、このような研究者が育っているということこそが、まず和田先生の最も重要な仕事の一つに数えられるのではないだろうか。和田先生のこれまでの多岐にわたる膨大な仕事のうち、このシンポジウムでは最初の二つのセッションで「知覚」と「翻訳」に焦点が当てられた。これらのキーワードによって表わされる領域に対して「感覚の摘み草——五感の表象と戯れる」、「ことばのたろんぺ——とけては固まる翻訳の言葉」（「たろんぺ」とは秋田の言葉で「つらら」というセッションのタイトルを考

えだしたのも、和田先生のことを熟知している「弟子たち」である。

始まりの挨拶でも言及されていたのだが、退職記念のイベントを開催するにあたって、和田先生は自分が語るよりもむしろ自分がいままでかかわってきた人たちで、この人たちの言葉を聞きたいと思う人に語ってもらおうというかたちをとりたかったということだ。第三部は和田先生自身が語ることになったが、第四部は三人の詩人たち（くぼたのぞみ、ぱくきよんみ、山崎佳代子、司会：土肥秀行）が登壇する。和田先生自身をのぞくと、「感覚」をテーマとする第一セッション（岡田温司、小沼純一、沼野恭子、福嶋伸洋、山口裕之、司会：松浦寿夫）、「翻訳」の第二セッション（Giorgio Amitano、木村榮一、澤田直、都甲幸治、榎木伸明、西成彦、司会：久野量一）、そして「読みまどろむ」と題された第四部の全体で、総勢一七人ももの研究者・詩人が和田先生を囲んで登壇したことになる。さらにビデオレター（タブツキ夫人 Maria José de Lancaster、柴田元幸、花本知子）によるメッセージ、ミューンヘン在住の詩人四元康祐氏からの和田先生に捧げられた詩もこれに加わる。

最初のセッションの冒頭で、岡田温司氏は『声、意味ではなく』について言及しながら、そしてとりわけアガンベンとベン

ヤミンを念頭に置きながら、意味の到来とともに排除されるものとしての「声」、そのような声を召喚することに言及する。そして、もう一つの論点として、分身を追い求める行為としての「変身」、そしてそのような変身としての「翻訳」について指摘する。この「声」と「変身」は、和田先生のすべての仕事にそれをめぐって展開されてきたものとしてここで語られたわけだが、長年の友人である岡田氏のこの導入の言葉は、このシンポジウム全体が収斂して響き合う道筋を与えるものとなった。一七人の登壇者たちは、それぞれの専門にかかわりつつトークを連ねていったのだが、例えば『ヴェネツィア 水の夢』を引用する沼野恭子氏も、イエイツが「捨てた」詩をひたすら朗読する榎木伸明氏も、そしていうまでもなく三人の詩人たちも、この場に「声」を現出させ、その声の経験を見ながら次々と重ね合わせてゆく。そのようにして、時が進むにつれてますます濃密なものとなってゆく、不思議で幸福な「声」と「変身」の空間が紡ぎだされていった。その流れの中心に、第三部で語られる和田先生自身の講演「声の在り処——詩から詩へ」もまた、「声」について語る「声」が語りだす場となっていた。和田先生が話するのはこれまでもいろいろな機会に聞いてきたけれども、この空間のなかで生み出されていった声たちがまさにここに収束していくかのような、不思議な力が生み出されている場に私は居合わせていると感じていた。（それがおそらく私一人の思い込みでないということは、私のすぐうしろの席で聞いていた詩人たちが、和田先生の講演の最後の一言が消えていった瞬間に感嘆のため息をもらしていたことからもしっかりと確信することができた。）

それにしても、一三時からほぼ六時間にわたる長丁場であったにもかかわらず、長きを感じさせることのない、きわめて密度の高い時間だった。この「報告」では、語られた言葉たちの伝える内容そのものについてはほとんどふれないままとなってしまうが、ここで語られたことはおそらく本のかたちで現れることになるだろう。そこでもまた、この場で生み出されていた不思議な力の収束が見られることになるのではないかと予感している。